

---

# あたしは天下のオジヨー様！

葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あたしは天下のオジヨー様！

### 【Nコード】

N9852Z

### 【作者名】

葵

### 【あらすじ】

あたし、楠木日向！

ちよーっと風紀の悪い学校を仕切ってる  
世間一般に不良ってヤツ。

あ、そこまでガラ悪くないから。  
むしろ正義のヒーローだから！

そんなあたしだけど、

ひよんなことから世界屈指のオジヨ一様になることに！

ちよつと、ちよつと、ちよつと！

あたしの生活どうなっちゃうの？！

## 第1話

いつやほー！

はじめましてー！

あたし楠木日向！  
くすのきひなた

中学から徒歩5分に住んでる14歳。  
ピッチピチの14歳！

あ、2回言っちゃった。

とにかく今日から中学3年生！

もう気合い十分だよ！

制服バシツときまつてるし、気分上がる！

憧れの中3！

ついに、あたしが川中かわちゅうの女王に！

説明がまだだったね。

気分がよすぎて取り乱しちゃった。

川中っていうのはあたしが通う川崎中学校のこと。

不良が集まったご近所でも評判の中学校。

奥さまの井戸端会議でもよく出る話題。

ようするに不良の巣窟ってこと。

で、川中は代々中3の女子が支配することになってる。

なぜかはあたしにもわからない。

川中7不思議の1つ。

説明はされてない！

されてないから7不思議なのか……。

ちなみに15代まで続いてる。

歴史長いよね。

で、その支配者をこう呼ぶ。

女王。

## 第2話

でね、その由緒ある女王にあたしが選ばれたの！  
すっごく嬉しい！

だってあの女王だもん！

テンション上がる！

今まで長かった……。

あたしが川中の支配者に！

ほんとダメ。

気分上がりすぎて死んじゃう。

学校着く前に死んじゃう。

あ、学校が見えてきた。

もうスキップだよ！

空までランニングできそうな気がしてきたよー。

空まで行っちゃったらそこは天国だけどね。

女王になる前に死んじゃうけどね。

ああ、校門が華のゲートに見えてくる！

ボロボロの校門にとりえ発見！

こういうときはいいよね！校門。

なんか廊下が赤い絨毯に見えてきた！

落書きだらけだけど、輝いて見える。

こんなに廊下って素敵だったのね！

「あ、こんにちは。楠木さん」

怖そうなお兄ちゃんに頭を下げられる。

ノンノン！

あたしは「女王様」なんだから！

楠木さんなんて呼ばれるのも今日で最後！

そう思うとにやけてくる。

ああ、こんなところでにやけてたら変人だわ！

メンツ台無しよ！

### 第3話

「もーすぐねえ」

時計が指すのは8時半。

あとちよつとで女王任命式！

え、授業始まるんじゃないのって？

不良が授業出てるわけないじゃない！  
たまに出てるけどさ。

あたし、社会だけはできるんだよね。

あ、あと体育と音楽と。

ほかはダメダメだから出る気なし！

廊下を歩いてるとたくさんの人に頭を下げられる。

この崇拝度！

半端ないね。

ほんとにどっかの国の王女みたい！

ま、あたしは川中の王女なんだけどね。

いつもの音楽室へいく。

ここが不良のたまり場になってる。

あー、今日もたまってますね。

いつも以上にたまってますね。

あつたり前よね！

だってあたしの任命式なんだもの。

みーんな来るわよね。

来ないとうなるかわからないしー。

御苦労さま。



「はい、日向こつち来な」

卒業したはずの15代目王女が手招きをする。

任命は元女王がすることになってる。

わざわざ来てくれるんだよね。

ということは来年私がやらなきゃいけないのか。  
面倒だな〜。

「はい」

私は壇にあがる。

このボブの茶髪の綺麗なお姉さんが15代目。

いつみても綺麗でうらやましい。

形のいい唇を開く。

「15代目女王、桜がこの者を16代目と認める」

パチパチパチ！

大きな拍手があがった。

みんなが祝福してくれている！

「あなたの名前は千影よ」

女王は名前では呼ばれることはない。

そんなの、恥になる。

だから、女王は新しい名をもらう。

この人も、桜という名ではない。

あたしの場合は千影。

千影……。

「あたしは千影！あたしが女王よ！」

皆が一斉に頭を下げる。

あたしは……16代目女王、千影よ！

## 第4話

「さっすが、ひな……千影様っ！百合感激です」  
「そう？ありがとう」

このすつごくかわいい子は木下百合きのしたゆり。  
すごく幼く見えるけど中2。

そしてこの子も不良。

まったくそう見えないんだよね。

背は低いし、声は高いし。

でも、不良。

「百合、一生千影様についていきます！」

「遠慮しときます」

一生ついてくるのは迷惑かも。

なぜかあたしにすつごくなっている。

謎だなあ。

ほんとにこれでいいのかな？

あたし、何度も同じことを思ってる。

百合、こんなにかわいいのに。

あたしについてきていいの？

間違ってる。

間違ってるよ。

百合は来ちゃいけない。

こっちの世界に来ちゃいけない。

前に聞いたことあったっけ。

不良でいいのって。

そしたら百合は言ったよね。

「これでいいんです」って。  
笑ってた。

でも、すごく悲しそうだった。

問い詰めはしないけどさ。

不良には、いろいろあるから。

あたしだって例外じゃないし。

こういうことって聞いちゃいけないの。

不良の中の暗黙の了解だから。

## 第5話

「ただいまー」

一日終わって家に帰宅。

今日はずっと頭をペコペコ下げられた。

気持ちはいいけど、ずっとなんか変な感じがする。

初日なんだし、当たり前か。

今のうちに気に入らないうちで考えてるのかな。

あたしも昔はそうだったし。

女王のお気に入りには、特典いっぱいだからさ。

いろいろと便利。

次期女王も夢じゃなくなるし。

あたしは単純に桜様が好きだったから一緒にいたんだけどね。

「おかえり。さ、ご飯食べようか」

この男の人はあたしの叔父さん。

お父さんじゃなくて叔父さん。

お母さんの弟なの。

ちなもに名前は幸弘<sup>ゆきひろ</sup>さん。

あたしのお母さんとお父さんは5年前に他界した。

不幸な火事だった。

隣の家の人の寝たばこが原因で、あたしの家に燃え移った。

あたしは一人になっちゃった。

そんなときに幸弘叔父さんがあたしを引き取ってくれた。

幸弘叔父さんはまだ結婚してないから、あたしと2人暮らし。

これはこれで満足してる。

叔父さんはあたしが不良なのを知ってる。  
知ってるけど止めない。

止められてもやめる気はないけどさ。  
なんでだろーね。

「あ、きんぴらごぼうおいしい！」

「この、ほうれん草もおいしいよ」

見ての通り、裕福とはお世辞にも言えない。

だけど、あたしはこれがいいの。

だって、楽しいもん。

こんなご飯でもおいしいもん。

……すくなくとも、1人になることはないから。

1人ぼっちはもうやだ。

誰かと一緒に暮らしたい。

だからあたしは大満足。

## 第6話

「おはよう。幸弘叔父さん」

「ああ、おはよう。ひなちゃん」

今日は余裕をもって起きることができた。

いつもは遅刻寸前。

授業にじゃないよ。音楽室に。

だから朝ドタバタするのにも幸弘叔父さんは慣れてる。

だけど今日は6時半に起きたから、びつくりしてる。

もー、あたしをなんだと思ってるのよ！

「髪、ボサボサだよ。とかしておいで」

近くにおいてある手鏡であたしの現状を確認。

あー、これはひどい。

惨劇のあとみたいになってる。

大きな鏡のある場所まで行って、ブラシで丁寧に髪をとかす。

胸下まである焦げ茶の髪がいつもみたいに戻っていく。

このままならなかったら、どうしようかと思った。

だって、これじゃ学校にも行けないよ！

あたしも一応髪を染めている。

金髪とかは嫌だから、焦げ茶を選んだ。

ほんとは黒いままでもよかったんだけど、やっぱりそれはね。

不良の威厳が台無しになっちゃうからって言われて染めたの。

それに、幸弘叔父さんの迷惑にはなりたくなかったし。

「いつてきまーす」

8時になったから家を出る。

家の前には百合。

「千影様！おはようございます」

「……」

……何でいるの？

あたし、別に約束してるわけじゃないし。

そもそも百合に住所教えただけ？

この子、もしかしてストーカー？

「百合、ずっと待っていました」

何分待ってたの？

いつからいたの？！

聞けない……。

怖くて聞けない。

ていうか、待ち伏せの間違いじゃない？

「危険ですから、百合が行きと帰りを一緒にさせていただきます！」

「御遠慮させていただきます」

……この子、やっぱり危険だね。

今すぐ警察に……！

「ちょ、ちょっと！」

「おじさん、お金あるんでしょう？お小遣いちょうだい」

近くの路地から話し声が聞こえてきた。

「百合、静かにして」

1人で話を進める百合をひとまず黙らせることに成功した。

「ほらー。いつあいあるじゃーん」

路地をそつと覗く。

そこには制服を着た2人の男子学生。

あの制服は……。

「紀乃川中ですね」

いつの間にか横にきていた百合があたしが答えを出す前に言った。

紀乃川中……。

あそこは、最悪の中学校。



あたしたちの学校と近いけど、仲はものすごく悪い。  
何かあるたびに喧嘩してる。

だって、本当にあの中学校は最悪。  
あたしが女王になったからにはあの学校はつぶしてやらないといけない。

そう考えてたけど、早くもあいつらと会うことになるなんて。  
偶然にもほどがあるわ。

朝から騒動起こして。

ほんつとくに面倒な奴らだわ。

あたしがぎったんぎったんにしてやる。

「百合、下がってなさい」

「いえ、百合が行きます」

下がってなさいって言ったのに、百合はあの2人の前に躍り出た。  
あの子……。あたしの命令を無視したわね。

「なんだあ、お前」

「こいつ、川中じゃん」

「へえー結構かわいいし」

「じゃ、お前、おれたちと来ないー？」

2人がケラケラ笑う。

ふざけんじゃないわよ。

## 第7話

あんたら、百合をなめてるんじゃないの？

こーんなにちっちゃくて、かわいくても、百合は喧嘩強いよ。馬鹿にするんじゃないわよ。

「朝からなんですか！？いちいちめんどくさいことをしてっ。

本当に暇人ですね。千影様と百合の邪魔をしないでください！」  
最後の方に変なキーワードを見つけたけど置いておいて。

百合は2人の紀乃川中の男を睨みつける。

結構迫力あるんだよね、こういうときの百合って。

「おい、何生意気なこと言ってんだよ」

「後で泣いても知らないからな」

さっきのケラケラ笑いをやめて、百合に殴りかかる。

2人で殴るうなんて卑怯な奴だわ。

そんなの、百合のハンデにはならないけどね。

「その言葉、そっくりお返しします！」

百合は軽く体を右に傾け、相手の拳をよける。

クリーム色で、かたにつくかどうかぐらいの髪がさらっと揺れる。

こんなときでもかわいいね、百合は。

百合が鉄拳を顔面にたたきこむ。

2人はその場に崩れ落ちる。

馬鹿だなー！。

あんたらみたいなのが百合にかなうはずがないじゃん。

「こりたら学校にさっさと戻ってください」

敵にまでその敬語を止めることはない。

でも、そんな丁寧な言葉づかいが怖い。

恐怖心をあおる。

「ひ、ひいー！」

2人は転がるように逃げて行った。

あ、本当に転んだ。  
相当焦ってるわね。

「千影様！」

百合があたしのところまで戻ってくる。

「あたしの命令ぐらい守りなさい」

「すみません。あんな奴ら、百合で充分だと思ったので……」  
しゅんとなる。

そんな顔されたら、許してしまいたくなる。  
いつもいつもそう。

あたし、この顔に弱いだよ。

「いいわよ。そんなに気にする必要ないわ」

あたしはあの2人にかまれてた男の人に向って手を差し出した。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

その人は、スーツを着ていて、会社員かなんかだと思う。  
ひよろつとしていて、ふちなしの眼鏡をかけている。

「君、名前は？」

「聞くときはそっちから名乗りなさいよ」

失礼ね。

マナーぐらい守りなさい。

「私は渡辺幸助」  
わたなべこうすけ

「あたしは千影」

男の人が？マークを頭に浮かべている。

当たり前よね。

千影、としか名乗ってないんだもん。

ふつうは楠木日向っていわないといけないんだけど。

でも、あたしは千影。

「あたしは千影」

もう一度言っ。

この名前を渡辺っていう男の頭に刻み込むように。

## 第8話

「千影様、百合はよるところがあるので先に行っててください」

学校に着いて、音楽室に向かう途中、百合はそう言うてにこやかにあたしの傍を去って行った。

嵐みたいな子ね。

あわただしいつたらないわ。

「はやく戻ってきなさいよー」

廊下をダッシュする百合に向って手を振った。

「はいー。すぐ戻りますから」

ぶんぶんと手を振り返す百合。

手、とれるわよ。

「あ、千影さん」

音楽室の前で待機する1人の不良。

昨日見たスキンヘッドの兄ちゃんじゃない。

名前は……。なんだっけ？

忘れちゃった。存在感あんまりないからなー。

「原田です。今日、新入生をつれてきましたんで」  
原田だ。

思い出した。

あ、これじゃ思い出したに入らないかな。

「新入生かあ」

こっちも忘れてた。

新入生の選別やらないと。

うちの不良軍団に入れるかどうかの。

毎年恒例のイベント。

まあ、ほとんど入れちゃってるけど。

人数多いことにしたことはないしね。

だから、不良が増える一方。

え？卒業するからプラマイゼロだって？

そんなことないわよ。

あたしたち川崎中学は矢野高校っていう高校と

同盟みたいなのを組んでいる。

実質は主従関係みたいなんだけど。

だから、高校の方に中学の時の不良がにたまっていく。

高校じゃ、単位とらないと卒業できないからね。

そのせいで、どんどんたまっていくの。

「おい、千影さんがきたぞ！」

原田が音楽室の扉を開けた。

## 第9話

パチパチパチ。

昨日みたいな盛大な拍手が上がる。

あたしは胸を張って堂々と不良たちの前を通り過ぎ、用意されてる豪華なソファに座る。

まあ、豪華ってほどじゃないけど。

あたしたち不良にはもったいないかも。

お、みたことない顔がちらほら。

こいつらが新入生ね。

あー、今年は女が多いわ。

嬉しいけど、戦力にならないと無意味だしな。

「すみませーん」

甘い声がドアのほうから聞こえる。

この声は。

「百合ですー。遅くなりました」

やっぱり百合。

「で、後ろにいる子は？」

皆が警戒心いっぱいにならみつけているのは、百合の後ろに隠れてる、誰か。

不良……じゃなさそうね。

「百合の従妹の月夜つきよです。実はいろいろあって……」。

この子もうちに入れてほしいんです」

百合は申し訳なさそうにうだなれる。

そっちは後で聞くとして。

あたしが気になったのは別の方。

「月夜、あたしの隣に座りなさい」

こっちに来るように言ってみる。

ちらりと見えた髪がとってもきれいだっただうな子なのかな？

「は、はい！」

百合の背中からすつと出てくる。

なんだ、そこまで内気なわけじゃないのね。

「わ、私、宮部月夜みやへつきよといいます」

さらつと、腰まである金髪が揺れた。

染めてるんじゃないさそう。

あの金髪は自前ね。

少しウェーブのかかった髪。

すつごく綺麗。

そして、目。

透き通るような青。

海みたいに深いけれど、空みたいに鮮やか。

金髪に青い目。

この子、もしかして……。

「あなた、ハーフかなんか？」

近くまで来た月夜に尋ねてみる。

月夜はビクツと肩を震わせた。

「千影様！ハーフって言うのは禁句……」

「ハーフだなんて言わないでください！！」

百合の静止の声を上回るほどの大声であたしに怒鳴りつけた。

あ、あたし、何か変なこと言った？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9852z/>

---

あたしは天下のオジヨー様！

2012年1月1日21時47分発行